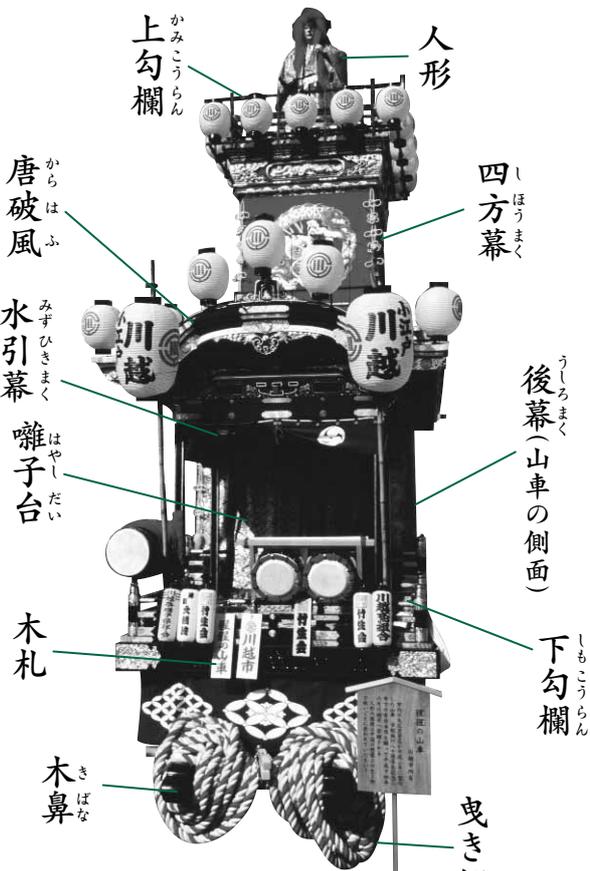


祭りの主役、山車

川越まつりに参加している山車は、現在二十九台あります。その中で県指定の有形民俗文化財が十台、市指定の有形民俗文化財が一台あります。そのほかに、制作から五十年以上が経過した山車で、市民文化の向上と川越まつり発展への貢献があったとする歴史文化伝承山車に、三台が登録されています。

一般的な山車は、四つ車の台車で、二層の鉦があり、その上に人形が取り付けられる構造になっています。人形と四方幕が付けられた鉦はせり上がり式になっていて、人形も含めると、高さは八メートルほどになります。



山車の各部名称 (川越市の山車)

ます。四つ車の台車が主流ですが、元町二丁目・六軒町・大手町の山車は、三つ車になっています。文久二年(一八二六)に志義町(現在の仲町)が初めて現在のよう

な四つ車で二重鉦の山車を建造したと伝えられます。それ以降、この形が主流となりました。その後、明治時代になると回り舞台が付けられ、曳っかわせが行いやすくなりました。

山車は、組み立てられた状態で保存されるものとそうでないものがあります。組み立てられていない状態の山車は、祭りの数日前から組み立てが始まります。山車の組み立てに、

山車の運行には、とびの皆さんが携わります。方向転換は、腕の見せどころです。山車の方向転換には左のように金てこを使ったり、下のよう



くぎはいつさい使われません。大小さまざまな部品を組み合わせ、山車が組み立てられます。

それぞれの山車を見分けるには、まず山車の上の人形です。各町内の山車は、「〇〇の山車」と人形の名前で呼ばれています。例えば、川越市の山車に乗っている人形は、「猩々」(しょうじょう)のため、「猩々の山車」と呼ばれます。

人形が出ていないときは、曳いている皆さんが着ている衣装に入っている町名で、見分けることができます。また、止まっているときには、正面に付けられた木札を見れば、山車の名前がわかります。この木札には町名のほか、乗っている雑子連名・人形の名前などが書かれています。

す。

山車人形

山車に乗せられている人形は、高さが人の身長よりやや高く、顔も大きめに作られています。下から見たときによく見えるようにするためのくふうです。

古くに作られた人形は昔話の主人公・舞や能の登場人物が多く、最近作られた人形は、歴史上の人物が多いようです。

例えば、昭和五十七年に作られた脇田町の人形は、徳川家康です。山車を制作するとき、町内の皆さんで話し合いをして、仙波東照宮や喜多院など、家康にちなむ名所が川越にあることから選びました。

三輪の 耳と目と楽しむお囃子

川越まつりで見られる囃子は、「王蔵流」「芝金杉流」「堤崎流」の三つが主流になっています。そのほかにも、「木ノ下流」「小村井流」などの流派も市内にはあります。

王蔵流・芝金杉流は江戸から、堤崎流は現在の上尾市から入ってきた流派で、それぞれ市内に広がっていききました。

当初は、山車を保有する町内が隣の農村から囃子連を呼んでいましたが、最近では山車保有町内でも、囃子連を持つところが多くなっています。

山車に乗る囃子の編成は、笛一人・小太鼓二人・大太鼓一人・鉦一



川越市囃子連合会  
副会長  
細野 稔さん  
(60歳・南田島)

南田島囃子連は、明治の川越大火以降から川越まつりに参加し、現在は菅原町の山車に乗っています。囃子を演じる者にとって、山車に乗るのは誇りです。

囃子は笛がリーダーで、調子を合わせます。踊り手が代われば曲が変わったという合図です。にぎやかな曳っかわせもいいですが、囃子を楽しむのであれば、宵山がお勧めです。宵山の時に15分くらい聞いていれば、違いがわかってくると思います。

どこの囃子連もそうですが、後継者を育てていかないといけません。南田島囃子連でも、ちびっこ囃子連があります。この子どもたちがずっと囃子を続けてくれればいいですね。



囃子を盛り上げる、舞。上から、おかめ・ひよっこ・獅子舞

人・舞一人の計六人です。話を伺った南田島囃子連では、まず小太鼓を

覚え、それから各自で選んで笛・大太鼓・鉦・舞を教わります。曲目には、「ヤタイ」「カマクラ」「シチョウメ」「インバ」などがあり、それに合わせて舞は、きつね・おかめ・もどき(道化面)・たぬきなどの面

を着けて踊ります。

山車が止まっている状態のときにお囃子を聞いてみると、それぞれの流派による特徴がわかるといいます。

例えば、きつねが踊っていても、流派によって囃子の調子が異なっています。



4台の山車が囃子台を向け合い曳っかわせ

川越まつりの見どころの一つである曳っかわせ。囃子の勝負ではなく、お互いの山車の最も得意とする囃子を披露する場です。文化十一年(一八一四)、屋台どうしが交差するときは儀礼としてお互いの囃子を披露し合うという文書があり、これが曳っかわせの始まりとされます。

三輪の 祭の楽しみと曳っかわせ

明治時代、志義町の山車に回り舞台が付けられたと伝えられています。その後他の山車にも広がり、互いの囃子台を正面に向かい合わせた、複数の山車がそろったときに右へ左へ回転したりと、曳っかわせがより盛り上がるようになりました。

曳っかわせは、囃子の皆さんにとって緊張する場です。自分たちの囃子の音だけが頼りになるので、聞き漏らしてはいけません。他の山車の演舞と周りで見ている皆さんの歓声の中で、囃子の皆さんは、自分たちの持っている技術のすべてを披露しています。

十月十五日(土)・十六日(日)、二十三日の山車が参加し、川越まつりが行われます。

ことしの川越まつりに参加する山車・宵山や山車ぞろいの時間・交通規制については、九月二十五日発行の広報川越をご覧ください。